２０２０年度　入門講座２０２０年９月２７日(日)

**第十五課　奇跡物語　（１）**

聖書にみる奇跡物語

　「この男は多くのしるしを行っているが、どうすればよいか。このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう。」ヨハネ11:47-48

現代においてもイエスの奇跡につまずく人は少なくありません。最初から拒否する人、逆に誤った期待を抱く人もいるでしょう。しかし、奇跡を頭から否定することには無理があります。

1. もし史実でなく弟子たちが創作したものだとした場合、まだ目撃者や敵対者が生存していたので、自分たちを不利な立場に置くことになります。
2. 指導者たちにキリスト殺害を決断させた理由は奇跡にありました。奇跡によって多くの人がキリストに引き寄せられるのを見た当時の指導者たちは、それがローマに対する抵抗運動となって暴動を起こすことになるのではないかと恐れたのです。

Ⅰ　奇跡とは何か

聖書の世界では、全ての現象の背後に人間を超えた神的な存在を信じています。この神的な働きが普通よりも活発で不思議であり、常識以上に神の力が働いているとみられる出来事を奇跡と呼びました。

現代人の常識は「すべてが自然法則のもとに整然と動く」という科学的事実に基づいています。この自然が常識や科学を超えた異常な働きをするとき、その出来事を奇跡ととらえました。イエスの行った奇跡、病気の癒し、嵐を沈めた話しなども、結果だけを見れば自然界でもたらされる働きと同じです。つまり時間をかければ自然の営みでもたらされるものです。その変化が急激であるとき「奇跡が起こる」と言います。知らず知らずのうちに思い込んでいる常識の枠を超えた形で突然起こるできごとを奇跡、あるいは奇跡的だと表現しています。

そこには様々な力が働きます。まだ見極められていない自然の力、火事場の馬鹿力のような特別な心理状態がもたらす力、悪霊の介入の可能性も否定できません。しかし、明らかに神の力が働いたとわかる場合があります。

＊キリストの奇跡が持つ意味

　「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は聞こえ、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている」（マタイ11:4-5）

イエスは、自分が行っている奇跡が神から送られてきた救い主であることを証明している」と答えています。つまり、奇跡は、神の憐れみが行いで表されたものです。

**Ａ「五千人に食べ物を与える」供食物語**。

1. マルコ６：３４～４４

「飼い主のいない羊のようなありさまを深く憐み（スプランクニゾマsplanknizomai）、

「青草の上に座らせ…」

　　旧約（捕囚）のイスラエル　　　　　　　　　　　　　　　新約のイスラエル

エゼキエル３４章　　　　　　　　　　　　　　　　　　ルカ１５章、１９章

　　神が民に呼びかけ約束する　　　　　　　　　　　　民が神の呼びかけに応える

　　　　　失ったものを　　　　　　　　　　　　　　　　　失ったものを

　　　　　尋ね出す神　　　　　　　　　　　　　　　　　　尋ね出し救う神

青草の上で養う神　　　　　　　　　　　　　　　青草の上で養う神

　　　　　　　　詩編２３　　　　　　　　　　　　　　　　マルコ６章

マルコがこの記事を書いた主眼は、パンの増加というよりすべての人が食べて満足したという「供食奇跡」に重点を置いています。

1. ヨハネ６章

「イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。集めると、十二の籠がいっぱいになった。」

　　ヨハネは、「感謝を捧げる」を意味するエウカリステオという動詞を用いて、最後の晩餐の時のようにイエス自らパンを分け与えており、キリスト者に聖体を思い出させようとしています。パン屑を**集める**ようイエスが命じている「パン屑」は、ギリシャ語は「ホスチア」を表す語です。

**Ｂ「湖の上を歩いた」イエスの物語　マルコ６：４５～５２**

マタイ．ヨハネ福音書でも、パンの話にすぐ続いてこの話が語られています。聖書の話は初めから描かれたものではなく、「口伝」、つまり口伝えで語られたものを後に書いたものと考えられます。主の日、礼拝の場でイエスが地上で話されたこと、行われたことが後々まで繰り返し話されました。中でも人々に愛されたこの話は、教会は各地に散っていたので、それぞれの地で自分たちの物語として語られたことでしょう。

　１．**「通り過ぎる」＝**神の顕現を現わす。

この表現は、神の顕現を現わす言葉です。「そばを通り過ぎようとされた」類似

個所をあげておきましょう。

1. 出エジプト；33：22，34：6

　神の聖性が強調されている。汚れを完全には払いきれない人間が神の聖なる輝きをまともに目にするなら死なざるを得ないほど、神は聖なる存在である。だから岩の裂け目に入ったモーゼを神の手がおおい、神はその前を「通り過ぎた」という表現になる。そのままでは神の栄光に耐えられない人間存在を配慮した手段。

「通り過ぎる」＝「神が人間に姿を表すこと」

1. 列王記上；１９：１１

「洞穴に入った」エリア

　２．**「わたしだ」**常に共にいて神としての力を発揮する神である。

マタイ・マルコにあるように、嵐の最中、イエスが弟子たちのもとに水の上を渡ってやってくる場面です。ヨハネの物語の強調点は、イエスが嵐を鎮めたことではなく、「恐れることはない。私である！」というイエスの威厳ある言葉にあります。

この語句を旧約聖書の中に探してみましょう。

1. エジプト3：14、

神はモーゼに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」

「わたしはあってあるもの」（ギリシャ語＝「エゴー・エイミー」）

シナイ山モーセに明らかにされた神の名の一つの形式です。

1. エレミヤ1：4－8

神の言葉の最後、「わたし（エゴー・エイミー）があなたと共にいてあなたを救う」は、意味内容において、湖上を歩いて弟子のもとに来たイエスの言葉「わたしだ、恐れるな」と同じ形式です。旧約時代に預言者を励ました神は、新約の時代にもイエスを通して弟子たちを励ましておられるのです。

古代人にとって、海や湖などの大水はカオス（＝混沌）は、神の創造や救いの力に反抗する力でした。この物語の眼目は、神として顕れたイエスが「わたしだ、おそれるな」と弟子たちを励まし、神の救いに敵対するこの世の勢力を静めたイエスこそ私たちの内に住まれる神であるという信仰の表明です。人間の目に不思議な出来事であるが神の目には必然のもの、神の業が人の目に見える形で示されたものです。